

「下地先生を支援する会」の皆さま

2013年が明けました。

昨年12月9日に下地さんが不当に逮捕された直後に、理由のない勾留から彼を解放し、大学での不利益処分を回避するために「下地先生を支援する会」が発足しました。それから不安と焦燥の20日間が過ぎ、最終的に不起訴・釈放という、当然とは言え喜ばしい結末を迎えることができました。この間に顕になった深刻な問題は残されていますが、その解決のためには「支援する会」とは別の名称、別の形態の組織と闘いが必要とされると考えます。当初の目的をひとまず達成したことをもって、「支援する会」を閉じることを皆さまにお諮りする次第です。

下地さん逮捕のきっかけになった10月17日の詳細な事実を顧みて、憲法に保障されたこのような行動が日本という法治国家で罪に問われることに私は大きな衝撃を受けました。不当な逮捕と長期の勾留によって下地さんとご家族にもたらされた屈辱の日々を、私は決して忘れることができないだけでなく、絶対に許すことができません。しかし、2ヶ月近い準備を経て彼を逮捕した警察・検察にとって、不起訴は敗北を意味します。彼らが公判を維持できるだけの起訴理由を見つけられなかったこと、さらには大量の押収品の中から再逮捕の口実を「発見」して勾留期間の延長を画策できなかったことが、この「事件」の真相を如実に示しています。

この勝利をもたらした最大の要因が下地さんの孤独な闘いにあったことは言うまでもありません。またそれを別とすれば、憲法研究者の抗議声明に代表される救援活動の社会的な広がりが大きく貢献したことも間違いのないと思います。ささやかではあれ私たちの「支援する会」も、そのような救援活動の広がりの一部を構成したであろうことを疑うものではありません。しかし、大学の教員がまるで反社会的な凶悪犯のように手錠をはめられ自宅から連行された今回の逮捕の理由と態様、つまりは法律専門家が口を揃えて指摘するように、戦後の混乱期以外では類例がないとされるこの「事件」にふさわしい反応が阪南大学であったかと自らに問うた時、残念ながら否と答える他ありません。下地さんが担当するゼミや講義の受講生からは、嘆願書も救援の署名も、あるいは大学当局への申し入れなども一切行われませんでした。また、少なくとも彼の逮捕理由には疑問があること、直ちに釈放さるべきことなど、大学人なら当然に頭に浮かぶ主張は、当事者の所属する学部をはじめとした各教授会からも、学部長によっても、また教学の最高責任者たる学長からも、いかなる声明の形式においても一切発表されませんでした。

そればかりではありません。大学は下地さんの逮捕を警察から事前に知らされていたことが12月19日に明らかになりました。大阪府警の公安第3課の人間が12月6日に来学し、下

地さんの逮捕と下地研究室の捜索を通告したことを、辰巳学長と神澤副学長はその日私どもに語りました。確かにこのような公安警察の常識に反する行為、あたかも大学の反応を試すかのような事前通告の真意を推し量ることは容易ではありません。しかし私の目から見て、彼らにはそういう意味での苦悩や迷いは一切窺い知れませんでした。それどころか、大学の被るであろう迷惑を回避するための親切心から警察が通告してくれたと解釈した学長は、その日の夕刻に「危機管理対策室」を立ち上げたこと以外何事もなそうとしませませんでした。また以上の事実経過は、翌週にかけて次々に開催された企画運営会議や学部長会議でも隠すことなく公表されたにもかかわらず、当局の措置（あるいは無策）に対する質問も異議や抗議も一切なかったと聞いています。これらを鑑みるに、学長から副学長、部長、学部長に至るまで、教学に関わる幹部全員に、警察による教員の不当な逮捕・研究室の捜索が大学の自治を危機に晒すのではないかという危機感は皆無であったと断ぜざるを得ません。

さらに、彼らには同じ世界で生きる人間としての共感や想像力がまったく欠如していたことにも、同じ大学の教員として慚愧に堪えない思いです。教育と研究を日々共にする同僚が寝こみを突然襲われ、憲法が保障する行動を理由に逮捕され、自由を奪われ、自宅や研究室を土足で踏みにじられ、取り返しのつかない屈辱を受けたのです。下地さんの苦悩と痛み、また愛する者から突然引き離された家族の当惑と悲しみに少しでも共感を覚え、その苦境に思いを馳せる想像力がわずかでもあれば、12月9日早朝以降に現実起こったこととは、いくらかでも異なるシナリオが実現したかもしません。この可能性を思うと、彼らが身を沈めている恐るべき冷酷さに私は戦慄を覚えます。

本学を蝕むこのような根腐れ病は、過去何年かの中に深く静かに蔓延していたものと推察されます。この間、管理の仕事から完全に退却して、自分のなすべき仕事を学生の教育に限定していた我が身を振り返るとき、その理由をあげるのは容易くとも、流れに抗しなければならぬ時に一石を投じなかった怠慢と無責任を、今は深く悔いています。

けれども今となれば彼我の隔たりはあまりにも大きく、私には最早いかんともし難いとの思いに駆られています。12月9日からの20日間は、時代に抗して闘うことの難しさを十分に感じさせてくれる貴重な経験でした。

「支援する会」を閉じるに当たって感ずるところを述べました。ご支援いただいた皆さまに深甚なる感謝の意を表します。

2013年1月7日

島浩二